開催地名	富山県 砺波市
開催日時	令和6年12月5日(木)19:30～21:00
開催場所	砺波市庄川生涯学習センター
語り部	草　貴子(宮城県仙台市)
参加者	砺波市防災士連絡協議会　100名(うち4名　市役所職員)
開催経緯	災害経験の少ない当市において、今後起こりうる各種災害への対応について、実例を踏まえた訓練の実施などは困難な状況にあるので今後の参考にしたい。
内容	■はじめに 講演者の草氏は、東日本大震災を仙台市内で被災し、自らも避難生活を経験した。その後、町内会長や母親としての視点を活かしながら、避難所運営や地域の子ども支援、多様な立場の被災者に寄り添う復興支援活動に取り組んできた。 現在は、消防庁の震災語り部ボランティアとして、災害の記憶や命の大切さ、防災の重要性を全国に伝える活動を行っている。今回の講演では、自らの体験をもとに、震災の教訓や防災の実践について語った。 ■災害の実体験と教訓 草氏は、実家が昭和61年の洪水および東日本大震災の津波で流されるという大きな被害を受けた。震災当時、町内全体が壊滅的な被害を受け、多くの家族が離散する様子を目の当たりにした。 この経験から、「災害は日常生活の延長線上で発生する」という意識を持つことが重要であると学んだ。災害発生時には、冷静な判断や迅速な行動が求められる。 ■命を守るために必要な備え 災害時に命を守るためには、物資の準備だけでなく、危機意識や人間関係の構築も不可欠である。 特に、家族や近隣住民との事前の連絡手段の確認や、避難経路の共有が推奨される。また、災害時に役立つ知識や技術を学び、それを家族や地域で共有することで、緊急時のリスクを軽減することが可能となる。 ■被災後の生活とその課題 震災後の避難所生活では、物資不足や衛生環境の悪化が深刻な問題となった。さらに、避難所の環境が長期化することで、住民同士のストレスや対立が生まれる場面もあった。 また、被災地では災害発生直後の支援だけでなく、長期的な復興支援が必要とされる。住宅の再建やインフラ整備だけでなく、精神的なケアや地域コミュニティの再生も、被災者の生活の質を決定づける重要な要素となる。 ■防災教育と世代間の課題 災害を経験していない世代に、その恐怖や教訓を伝えることは難しく、震災の記憶が「過去の出来事」として風化する危険性がある。 そのため、草氏は、具体的な被災の様子や現場での体験を語ることで、若い世代が実感を持てるように工夫している。 また、防災教育の重要性についても言及し、地域や学校での防災訓練やシミュレーションを通じて、実際の災害時に役立つスキルや知識を養うことの必要性を訴えた。 ■まとめ 災害に備えるためには、物理的な準備だけでなく、日常的な心構えや地域でのつながりが重要であることが再確認された。 災害発生時には、迅速な行動と冷静な判断が命を守る鍵となる。また、被災後の長期的な支援や復興、さらには次世代への記憶の継承が、今後の防災意識向上に不可欠である。 最後に草氏は、「災害はいつ起こるかわからないからこそ、日々の備えが必要であり、防災意識を持ち続けることが最も大切である」と締めくくった。

開催地より	本講演を受けて今後当市としては、自主防災組織中心の避難所運営訓練と、砺波市防災士連絡協議会と連携した防災イベントを開催し、防災意識の向上に努めていきたい。